

飾り瓦考－屋根の上に広がる世界

On a Roofing Tile and it's Design

春日井 真 英

Shinei KASUGAI

キーワード：鬼、鬼瓦、七福神、宝珠、水、火伏

Key word : Orge, Roof ridge tile with Orge figure, Seven deities for prosperity,
Treasure ball, Water, Protect charm against fire disaster

要約

屋根の上にある鬼面の瓦、鬼瓦は日本人にはかなり馴染みがある。しかし、この鬼面の瓦は一般には寺院などでしか見ることができない。民家の飾り瓦には他の図案のものが存在するのである。また、屋根の装飾は瓦の図案だけではなく瓦の上に置かれた「留め蓋」、「置き蓋」によってもなされる。だがこれも民家では一般的なモノではない。しかし寺、神社という宗教的施設では獅子や牡丹の花などの置き蓋の飾りを見ることができる。だが、調べるうちに一般的な民家でもこの飾りが置かれていることが判る。それらは、獅子や牡丹の花といったものではなく、宝船、七福神、それに波頭といったものによってなされている。七福神や宝船などの屋根飾りの象徴性を分析することから、家という空間を日本人がどのように意識していたかを考察することができる。著者は屋根の飾りの意匠を通して、そこには富の招致もしくは富を護る呪術が隠されていると考えたい。

Abstract

Onigawara, designed roof ridge tile, is usually in the the shape of an ogre. This type of roof ridge tile is very familiar to the Japanese, but in fact there are different shapes of designed roof ridge tiles on a Japanese private houses. The roofs of some temples and shrines are decorated with an ornament (留め蓋=tomebuta、あるいは置き蓋), the designs of which are usually Lion or peony flower. It is generally said that designs of roof ridge tile are chosen as charms for the protecting against fire-disaster. But I think this is nothing but a popular view, because there are no researches on the symbolism of the designed roofing tile and ornaments on the roof. If we analyze the symbolism of roofing tile and the ornaments on Japanese private houses such as seven deities of prosperity and treasure-boat, we will be able to find surprising Japanese ideas on the roof. I believe that the roof ridge designs are expressions of the desire for the prosperity.

はじめに

- 1 瓦屋根の世界へ
- 2 瓦の意匠
- 3 願望に満ちた屋根
- 4 守護と招福の願望

はじめに

筆者はこれまで天竜水系のさまざまな民俗文化を研究対象としてきた。その延長線上に、「豊川水系の鬼」にまつわる祭礼調査がある。さらに、これは「豊川水系に見る十一面観音と津島神社の分布と文化的背景の考察」という課題で日本学術振興会に申請し（平成14年—平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金—の一般研究（c）（2）（研究課題番号 14510036））に採択されたものと同じ基軸にある。この研究は、これらの地域調査及び研究の過程から生まれてきたモノである。祭礼の行われる寺社の瓦の意匠の微妙な違いに眼が行ったことから瓦の図柄が問題となり、さまざまに資料を収集、調査を重ねる内に、この瓦の意匠は「午頭天王鳥渡り」という津島信仰に通じる竜宮の存在が共通項として顕れて来るのではないかという仮説に至った。一般的に「火伏」と理解されている瓦の『水』という文字及び飾りだけからでは、確かに「火伏」という理解が可能である。しかし、ここで一部紹介する瓦の意匠からはこれまでとは異質な理解が可能な領域が浮上してくる。今後の研究しだいではこれまで全く意識されていない信仰が隠されているのではないかと考えている。また、この調査研究が、現代の民家の屋根の上の瓦に焦点を当てているところに特徴がある。これまでの瓦の研究が歴史、建築の領域からしかなされていなかったことと比較するとこれは全く異質と言えるものである。民家の屋根というフィールドでその意匠及び図案に注目することは、これまでなされていなかった。ここでは一般民家の屋根に載っている飾り瓦、あるいは飾りに焦点を置いて考えていく。

1 瓦屋根の世界へ

広い空の中には 罪もけがれもある
広い空の中には 何もないわけじゃない
広い空の上から さまよい降りてくる
泣いて泣いてごごえた 六つの花びらの花

中島みゆき（六花 心守歌=こころもりうたより）

広い空の下に広がる大地、そこには人々の世界が広がっている。だが、人々の飽くなき欲望もそこには渦巻いている。中島みゆきの歌う「六花」は人の欲望と絶望の結晶なのであろうか。広い空から六花の花びらが舞い降りるところは人々の心を映し出すところかもしれない。ふつうはあまり気にしない屋根。もし、歌のように人々の心を映し出す場と見る事ができるのなら、屋根は人間の怨念の渦巻く場所と見る事ができよう。この場所はそれ故に、すばらしい世界への入り口でもあった。そこには人々の願いと望みが凝縮している。

屋根の上に広がる世界に気がついたのはつい去年のことであった。それまでは大地に寝転がる犬のように屋根の上の世界には関係はなかった。そして、鬼瓦とは飾り瓦の一部ということさえも知らなかった。本来ならば、鬼面瓦について考えていくべきかもしれないが、ここでは一般の民家の屋根にある飾り瓦に焦点を当てながらそこから日本的な意識を考えてみたい。

この論考を書いている大変に困ったのは日が経つにつれ資料が多くなっていくことである。手持ちの資料でまとめながら調査に出かけると、いつの間にか瓦の資料が増加してくるのである。七福神の瓦（豊橋、豊川界隈の恵比寿、大黒、弁天）を見かけた事からいつかは出会える事ができるかなと考えていた宝船の瓦に偶然尾西市で出会えた。隅棟の上に乗っていたこの宝船（図1）は空の上から舞い降りてきたかのような感じを与えてくれる。屋根は、空の上からの中継点なのか、それとも波のように見える瓦の海から波を越えて船出する姿か、夢はどんどんと広がっていくことになる。そして、この宝船はたっぷりと宝物を積み込んでいる。



（図1 尾西市三条賀にて）

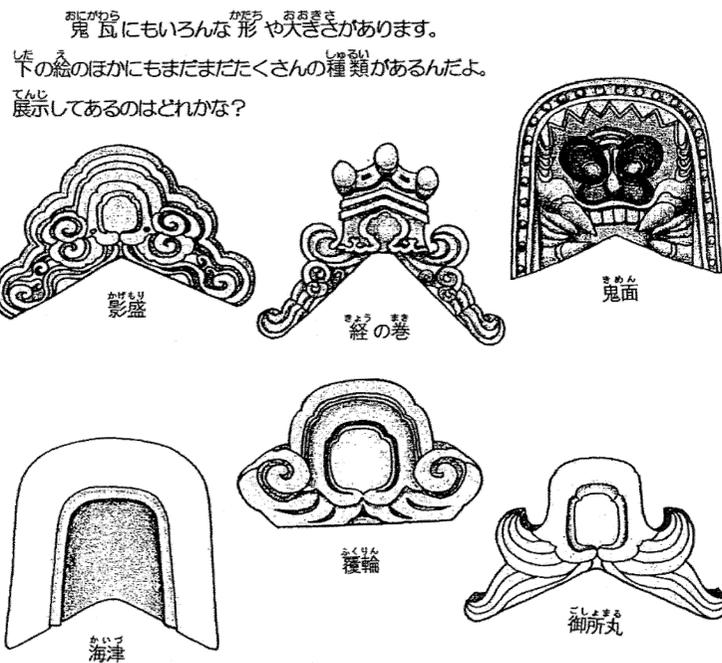
2 瓦の意匠

瓦に注目するようになったのは、額田町の亀石明神★1で「天から亀に乗った妙見様」が降りてこられたという話を聞いた事がきっかけである。この亀明神をお参りしたその後、付近の民家の屋根瓦に「亀」という字に似た模様（図2）を見てしまったのである。まさか、亀明神を祀っ



(図2 瓦の中央に見える模様「水」の角字、上部の雲の図案にも注目)

ているからその影響かなどと思っていたが、「亀」という字にはどうしても見えない。だが、仲間内では「亀」の字の飾り瓦が存在するという事で意味は通じていた。しかし、「亀」ではなく、これは「水」という字の角字である事が判明できたとき問題は次の領域に入っていったのであった。もちろん「水」という字の瓦もある。家の妻に「水」という字を見ることも少なくない。また、瓦自体がわき上がる雲のように見えることも問題であった。その範囲では通常言われるように「火伏」としての呪術性があるということは納得して良い。だが、瓦の意匠の多様性が他の可

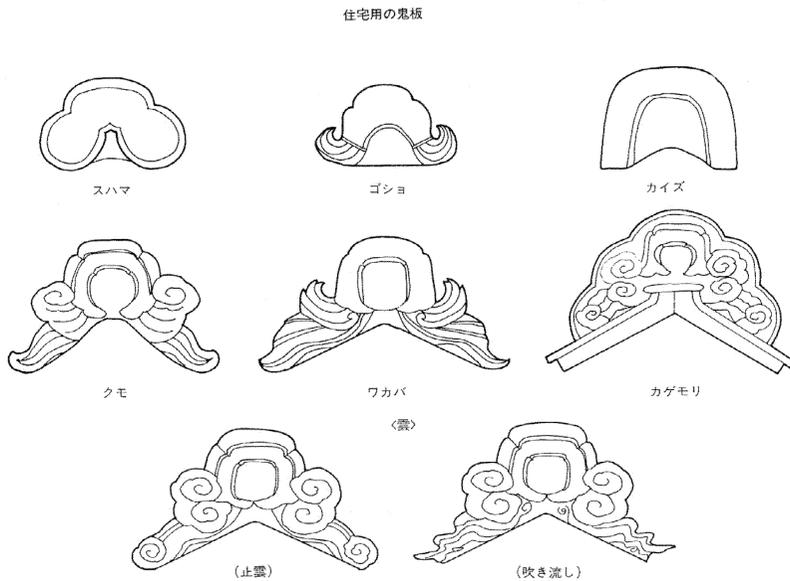


絵：『屋根の瓦職』日本屋根経済新聞社 より

(図3 高浜市の瓦美術博物館の資料より)

能性を暗示してくる。

一般的に飾り瓦には図3のような種類に分類されている。鬼瓦とはここで言うところの鬼面である。そして、ここで扱うものは基本的に影盛型に分類されているものである。もちろんこれらはさらに詳しく分類して行くのが図4、であり基本型として理解しておきたい。だが、瓦につけられている名称から容易に理解できるようにその意匠に共通するものは「水」に関連する事柄が中心にあるということは興味深い。ここでは、この名称が一般的に通用しているものという前提で話を進めていく。さて、ここで扱う瓦の問題は歴史的なものではなく、ごく一般的な現代の民家の屋根にあるものに焦点を当て、そこから日本人あるいは日本的なるものを考察していこうとする意図を持つものである。ときには古刹の屋根を引用してくることがあるが、それは説明の補助のためである。



(図4 『埼玉のかわら』埼玉県民俗工芸調査報告集 第4集 昭和61年)

図4に見るようにここでは中心部分(鏡)には文様が入っていないが、通常は「水」という字や家紋などが入れられていることもある。以下で『埼玉のかわら』★₂を参照しながらその特徴を述べてみる。それによると瓦の模様については全国的にそれほど大きな違いはないが、大きく住宅用のそれと寺社用の瓦に分類できるという。そして、住宅用の鬼板(鬼瓦)の様子はほとんどが雲・水で、若葉が多少作られる程度という。さらにゴシヨ(御所?)瓦は丸張り瓦の両脇にアラメ(荒布)をつけたものである。海藻を表現したもので、筋を掘っただけのあっさりした図柄のため、城や数寄屋造りの屋根に使うという。さらにこれは古くからある鬼板であり雲付きのはやる前は御所が中心であった。御所のアラメが雲に変わって雲付きになったという。(実は、この推移がどのようにして起きたのかが興味あるところである。)

この荒布（海藻）が図案化されていることおよび、かわらに「州浜」という型があることは興味深い。（筆者 註）

州浜：スアマともいう。菓子の素甘に似ているからだという職人もいる。州浜とは海に突き出た洲のある浜辺のことであるが、その州浜の形をした鬼板である。古くから使われてきた模様である。

州浜は蓬莱山の砂浜を模したものとも言われ、祝儀の飾物、州浜台の略で、烏台とも呼ぶ。出入りのある浜辺をかたどった台で、これに松竹梅、鶴亀、尉（じょう）と姥（うば）などの作り物を配して、婚礼、正月その他祝儀の席に飾った。進献する品物を載せることもあった。その形はつとに図案化されて紋所になり、また衣服や調度の文様としても用いられた。

つまり、めでたいことを象徴している図案と言うことができる。とくに、蓬莱山の砂浜を模していると言うことは重要な意味が秘められていると考える。（筆者注）

若葉：若い新芽の図柄で、唐草模様から出たものとも言う。家が若葉のように伸びていく願いが込められている。（みずみずしい春、もしくは初夏は雨のたくさん降る時期とも重なる。つまり、そこには水の象徴性が隠されていることになる。）

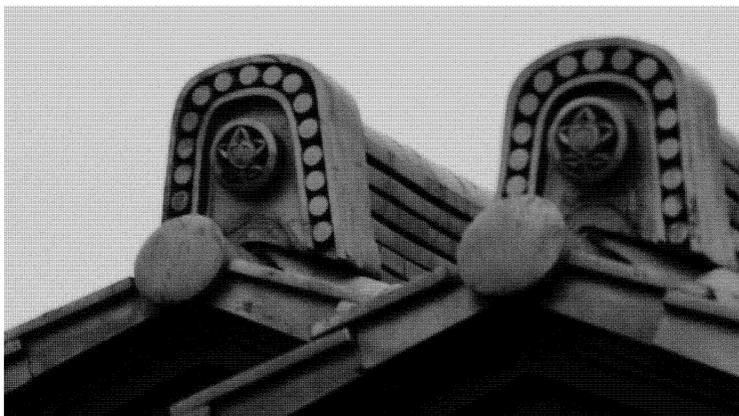


（図5 三河一宮上長山・社殿）

菊水（図5）：菊と水（波）を彫り込んだ鬼板である。関東地方では高級住宅用であるが、信州ではどんな小さな鬼板でも菊水にしているという。菊は花の中でも作るのが簡単で、しかもできあがりが見派に見えるのでよく使う。牡丹などは作るのが大変な割にはできあがりが目立たないという。

海津（図6）：昔、交通の要所であった琵琶湖北岸の地名から来たと思われるが、詳細は不明である。最も単純な鬼板で、方形屋（寄棟）に使用する。昭和40年頃から使われ出し、現在は住宅用として盛んに作られている。ただし、中には石塔を建てたようでいやだという人もいる。（よく見る海津式のもの、鏡の部分に馬蹄形の縞が掘られている。この縞模様は魔除けの意味があ

るのかも知れない。さらに、図6に見るように縁の部分にある丸いものは数珠と理解されている。)



(図6 これは数珠付きの海津。鏡の部分には家紋が入っている。大垣周辺で)



(図5 これは鳳来町大野の影盛、台座のところにも波模様が見える。また巴に亀の飾り)

影盛：図4、及び5参照のこと。これは、カゲツキ(影付き)・カゲモノ(影物)とも言う。これは、もともと鬼板と棟の接合部に雨漏り防止のため、鬼板の裏側に鬼の外側に合わせて盛り上げて漆喰を塗っていたものを、鬼板として、一緒に作るようになったものである。この後ろの漆喰をカゲと呼ぶところからの名称である。側面が丸く盛り上がっているのが特徴で、このため非常に立体感が出ている。また、影盛は必ずオニダイ(鬼台)をしようする。また、両脇に雲がつくのが一般的であり、側面が丸く立体感のあるのが特徴である。

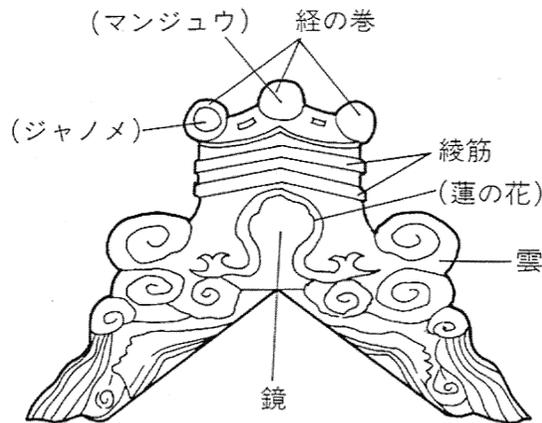
大きな流れで見ると、古くはあっさりした御所が中心で、それが大正初期から雲付きになり、雲付きは第二次大戦後も長く主流であった。それが近年になって急速に海津が広まっているのが現状である。また、図柄だけではなく、側面から見た形も次第に立体感が出てきた。最初は頭などに平らな面に筋を入れただけであったのが、大正初期になると周囲に覆輪がついて立体的になっ

た。

大正末期から誕生した影盛も注目すべき変化である。漆喰の影も鬼板につけられて作られるようになり、重量感の強いものになったが、さらに石膏型の導入以後、細かいシビもはいる複雑な形の物となった。

実際に民家に見る瓦は、この影盛型が中心となる。そして、これが大正から昭和にかけて一般的であるということから瓦の構成を通して現代の日本人の意識をとらえる手掛かりを見ることができるのではないであろうかと考える。(筆者)

この他にも寺社の用の鬼板があり、中世には獅子口と呼ばれていた瓦から変化した「経の巻」というものを見ることができる。これは頭の上に筒状の経の巻がのるところからの名称である。経の巻は三本のせるところが普通でその先は丸瓦の形と合わせる。つまり、丸瓦が饅頭ならば(へこみがないならば膨らんだままとする。著者註)経の巻も同じにし、ジャノメ(蛇の目)(凹んでいる)ならば、ジャノメとする。カガミ(鏡)の中央の模様は蓮の花を表現しているという。



(図7『埼玉のかわら』埼玉県民俗工芸調査報告集 第4集 昭和61年)

数珠掛け：周辺に数珠がかかっている模様の鬼板。海津に数珠のついたもので、寺院用である。埼玉ではあまり使用されていない。(図6のように丸い飾りの付いた模様を数珠というらしい。筆者注)

鬼面(図8)：鬼板本来の図案であり、古代から見られるが、埼玉では近世以降の鬼面が中心である。魔除けの意味があるため、恐ろしい形相をしており、作者によってみな表情が違っている。両端に数珠掛けしたものが多い。鬼面の場合、口を開けた鬼(雌)と閉じた鬼(雄)があり、それぞれが一对として葺かれると言うが、現在、県内(埼玉)で作っている鬼板師はそれにこだわらず、みな口を開けているものがおおい。その方が迫力があるからという。



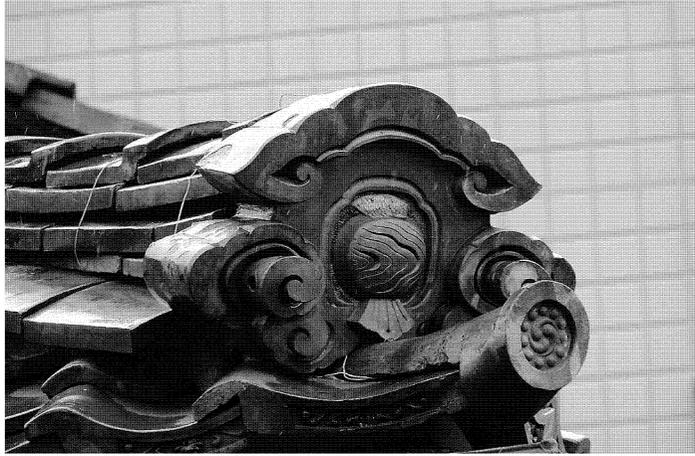
(図8、豊川市天法輪山養学院寺務所鬼面。この図の鬼面は奥三河の花祭りに出る鬼に似ている。一般の寺院で見る鬼面とは表情が異なっている。地域性もあるのだろうが興味深い。鬼面の両脇の竜虎の図柄も検討すべき対象となる。)

以上、『埼玉のかわら』をもとに概略してみた。つまり、一般民家で見ることのできる瓦の種類はすでに述べたように、影盛、御所、海津が基本的であることが理解できる。また、基本の御所瓦から大正期あたりで影盛の雲付きなどに変化してくるなど新しいものであることもこれらから容易に伺われる。じじつ、愛知県北設楽の方では昭和35年代あたりではまだコンクリート製の瓦が用いられていたし、それ以前では板葺きであったという。一般的に瓦葺きが普及してきたのは昭和55年代あたりと考えられる。もちろん地域的な差異は存在しようが、一般民家の屋根瓦というものは昭和30~40年のものと見ていくことは差し支えなさそうである。つまり、今、我々が目にする一般的な民家の屋根の構成はそのころからのものと見なしていくことが可能になる。

ところで、いろいろと話を聞いてみるとこの屋根の形？ いや屋根瓦の構成や種類を選ぶのは、どうも施主ではないらしいのである。これは大変不思議なことなのであるが、屋根瓦の種類決定権？は大工さん、あるいは工務店サイドにあるらしいのである。と、言うことはこの広い屋根の世界は大工さん、工務店側の創作の場と言うことになる。どのように屋根の意匠が決定されていくかという点についてはまだ不明であるが、どうも屋根に関して家主には口を挟む機会はなかったみたいである。

3 願望に満ちた屋根

確かに、屋根の上の意匠には「水」に類似する意匠は多い。しかし、火伏という実用的な側面からだけの解釈が、どこまで通用するのかということのかという疑問が残る。なぜならば、寶袋(図14)、打ち出の小槌(図9)、福(図11)、寶(図15 巴の図案)、宝珠(図15及び図16)などのよ

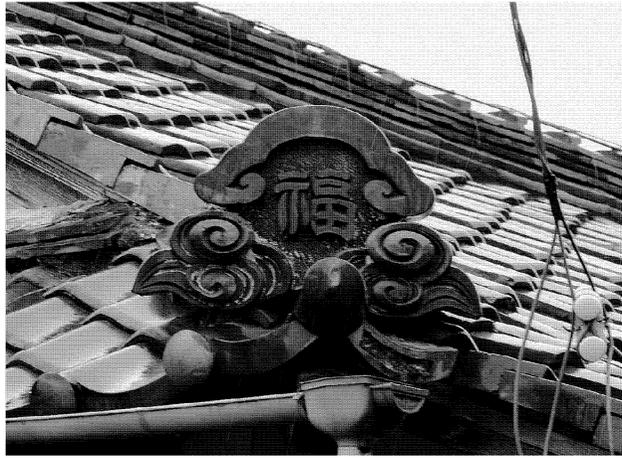


(図9 これは、大垣周辺の打ち出の小槌)

うな字の入った瓦を見ると「火伏」という解釈は納得できないことになる。また、民家には鬼面(図10)を見る機会はほとんど無いが、最近静岡、浜北周辺、名古屋などでも見ることがたまにある。ただ、商家の屋根に鬼瓦を見ることがあったが、民家のそれはまだ資料としてここで見せるものを有していない。ところで、この図10は 名古屋市内の商家のものであり、海津式の瓦の鏡部分に鬼面が入っているものである。



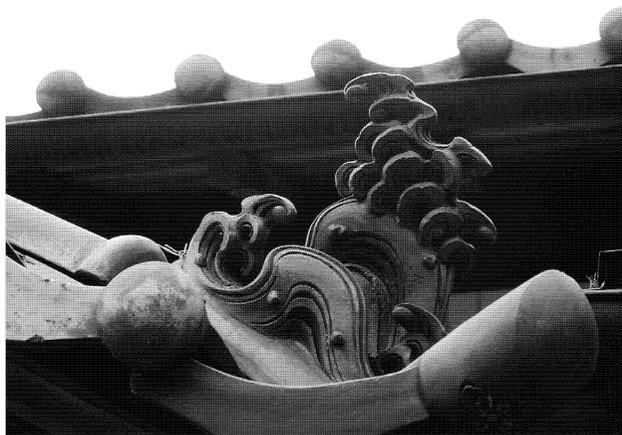
(図10 名古屋市内熱田区 蓬萊軒の屋根。海津式数珠付きの瓦の鏡に鬼面が入っている。台は若葉の模様で、巴には波と古亀、これも瑞兆の象徴と理解される。この反対側の瓦は別の民家に遮られてみることはできていない。あれば、巴は鶴の可能性が高い。鬼の上の飾りは鳥伏間<トリガスマ>鯨、鷗尾などに変形しているところもある。図12のように大垣周辺では立つ波形になっているものを見ることができる。)



(図11 大垣市周辺の民家、棟瓦の飾りに福の字)



(図12 大垣周辺の民家。逆巻く波形、だが鷗尾など連想させてくれる)



(図13 豊川市三上地区の蒜生神社社務所・屋根の盛り波、置き蓋)



(図14 長谷寺周辺の民家・寶袋)

ここで紹介しているものは、とくに記述していない限り民家の屋根瓦の写真である。

気になるのは、鬼板の部分にあつらわれているものが一見「水」とは関係のなさそうなものと言うことである。民家のこの寶袋は、かつてこの家が商家だった可能性を示唆しているのかもしれない。だが、鏡の部分に宝珠？が描かれ、巴の部分にまで「寶」という字を見るとき、明らかに違う次元で瓦の図案・意匠が構成されていることを考えても差し支えないであろう。ここでは、この種の図案を宝珠と理解して論を進めることにしたい。



(図15 垂井周辺・図柄は宝珠？・跨巴に寶の字)

図15, 16に見る、この種の宝珠が入る図案の瓦は寺院などでは多く見受けられるが民家の場合にはかなり稀である。だが、この図を宝貝と見るか、それとも宝珠と理解するかはまだ未解決な部分があるが、著者はその構図などから宝珠と理解して行きたい。その理由は、もし宝貝とするならば、この形状がもう少し細くあるべきではなかったかと考えるからである。さらに、屋根の上には置き蓋といわれる飾りがあるのだが、そこで用いられる球体にはこのような突起がつかない。

そういう理由から、この種の図案を宝貝としたい選択肢は残るのであるが、宝珠とした方が無難であろう。



(図16 長谷寺の塔頭。大棟に見る鬼板。鬼板の上の鳥伏間にも宝珠の図案が見える。両脇には涌き上がる雲そして流水模様がある。この流水模様が「水」の字に帰結していくのかもしれない。)

(図17 これは大口町界隈の民家の屋根に見る「珠」。波の模様から潮満珠と見るべきか、潮干珠と理解すべきかは不明。大垣周辺にも多々見ることができるが、東三河の平野部ではまだ見ていない。ただ、北設郡津具村で見たことを記しておく。)



4 守護と招福の願望

ここまでの瓦の図案・意匠だけからでも家の屋根には実に様々な象徴を見ていくことが理解できよう。単なる「水」だけでなく、水から発展してくる象徴の世界が存在していることが見て取れることになる。そのことは図12、13、の立浪及び17の波の上にある珠からだけでも容易に見ていくことができる。家の屋根の上に逆巻く波を見ることは、そこを広い海原に比定していくことを可能とする。また、ここから読み取れることは、家とはつまり護るべきところであり、邪なるものを寄せ付けてはならない場所に存在するということになる。そのためにも図18、19の鍾馗様などを大棟に飾っているのであろうか。一般的に鍾馗様が鬼板に来ることはなく、屋根の真ん



(図18 南設楽郡鳳来町大野の民家。これは鬼なのか、それとも鍾馗様か。手にしている剣から鍾馗様と見るべきか。足下の巴瓦が鶴丸になっている。脇の図柄は雲。)

中などにたち魔除けの役に当たっている。そういう意味から、別の神格とのすり替えあるいは読替がなされていると見ることもできる。ただ、図18の南設楽郡鳳来町大野のそれは大棟の飾りである。



(図19 これは豊橋市当古町地内に見る鍾馗様)

また、この鍾馗様が毘沙門にもすり替わっている可能性があるとしたら屋根の上の世界はさらなる発展を迎えるかもしれない。すでに述べたように豊橋市長瀬地区およびその周辺の屋根に見た七福神を紹介しておく。ところが、鍾馗様の形は一定していない。剣を振り上げたものや、

剣に寄りかかるなどしているものもある。この種の飾りを置いている家の人によると「隣の空き地に息子夫婦の家を建てたが、その家に負けないようにと思って奉った」（豊川）とか、「家の向きが神社の方に向いているので、そっちから悪いものが来ないようにと言う気持ちで」（三河一宮）という話を聞いた。これを聞いて不思議に思ったのは、息子に親を超えて出世してほしいという願いはないのだろうか、また神社からは神以外の何者かも来るのだろうか？ということである。考えてみれば北設楽郡の各地で行われる「花祭」では神返しの際に外道狩りを行う。それは、威力のある神とともによってくる低級な存在と考えられ、神がお帰りになっても存在し続けるので追い払うというものである。



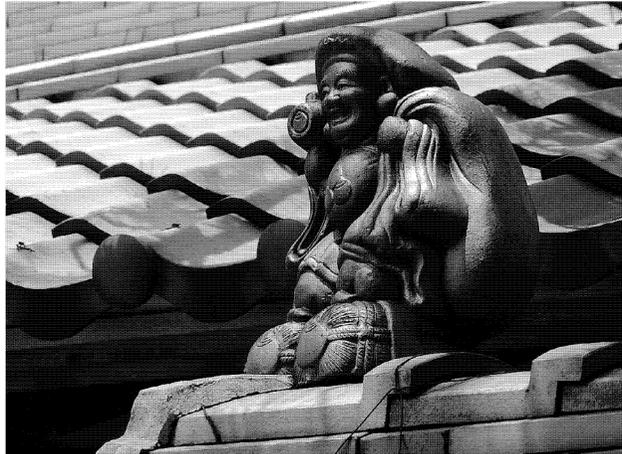
（図20 豊橋長瀬地区 恵比寿の図案。鯛はここからは見えない）

図20は、鯛を押さえる恵比寿であるが、可能性としてこの反対側には大黒が飾られていたかも知れない。しかし、そのことに気がついたのはごく最近のことであるので未確認である。愛知県の御津町の民家では恵比寿と大黒が載っているのを確認したことがその理由である。ただし、図



（図21 違う角度からの恵比寿。鯛の顔が明らかに見える。両脇の花は菊、しかし菊が用いられる理由は分からない。）

22の名古屋市天白区内の大黒は玄関の門の上に飾られていた。恵比寿は門の左に対称的に飾られていた。三重県の青山町で見たものには、やはり恵比寿と大黒の二体が載っていた。



(図22 名古屋市天白区内の大黒)



(図23 豊橋長瀬地区の弁財天 琴を弾き龍に乗っている姿が見える)

豊橋長瀬地区では恵比寿(図20, 21)と弁財天の瓦(図23)を見つけた。この他よく見るものとして大黒(図22)を挙げるができる。この大黒は名古屋市内でも時には見ることができるがそれ以外のものはかなり稀である。だが、養老の近くでは家の四隅の降り棟の三方などに大黒を飾った家を見たこともある。だが、さすがにこれまでのところ一軒の家で七福神すべてを飾ってあるところは見ていない。しかし、民家の屋根の上にこの種のまじないのものがあることをどのようなものにと受け止めるべきであろうか。さまざまな類の飾り瓦を載せた民家を「福祿寿」(図24、これは民家ではなく寺の庫裏のものである)のように長寿にあやかろうとするのか。あるいは恵比寿・大黒のように福德を招致しようとするものなのか。そして、屋根の上に立浪、波に遊ばれる珠の意匠を見るときこれまでの「火伏せ」としての視点だけでは納まりきらない要素



(図24 豊川市玉林寺で見たもの)

に行き当たることは明白である。筆者は、その納まりきらない領域を考えていくと「家」そのものに対する意識に通じるのではないかと考えるのである。それは、「水」によって示される異界に比定する事ができよう。つまり、「竜宮」である。そのように理解できるとこの「飾り瓦」の問題は牛頭天王、およびその南海の竜王の娘頗梨采女(はりさいによ)の伝承に通じてきてしまう。それは「牛頭天王島渡り」★3、祇園精舎の守護神とも行疫神とも目される牛頭天王の「嫁取り」と竜宮における幸福な生活と子宝に恵まれる情景と、その後の牛頭天王の住まいにみんなを引き連れて戻る様を描いた伝承である。

この伝承と絡めると民家の屋根は大空の下に波立つ海と見え、その波立つ屋根にさまざまな飾りを用いることで竜宮になぞらえ、幸せな家庭、豊かな福德の満ちているところと比喻しようと努めた結果の意匠ではなかったか。この広い空の下は、やはり欲望の渦巻くところであったと、達観した屋根職人達の創作空間だったのかもしれない。

(なお、この論考は平成14年—平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金に採択された一般研究(c)(2)(研究課題番号14510036)「豊川水系に見る十一面観音と津島神社の分布と文化的背景の考察」の一環をなすものである。)

註

1、亀石について

額田町教育委員会からはこの亀石、亀明神について以下のようなご教示をいただきました。

額田町大字宮崎字亀穴地内に天台宗林瑞寺があり、その隣接した地に同寺の鎮守明神として亀石明神が祭られています。

明治時代に同寺の僧が書き留めた「亀石明神伝記」には、「北辰妙見尊が亀に乗って降臨し、亀は此

の地にとどまって石と化した。そこで妙見尊を観請して祭ったところを明見（みょうけん 妙見）、石を祭ったところを亀穴と称した。（今、大字宮崎というところは、江戸時代には亀穴と称していた。）」と記載があります。

林瑞寺には亀に乗った北辰妙見尊の彫刻があり、星まつりをしています。

また、亀石明神には、谷川の水の流れる一画に亀形の石が安置されており、何匹かの亀形の石がありますが、中央のものがその亀石で、他はその後持ち込まれたものです。

2、『埼玉のかわら』埼玉県民俗工芸調査報告書 第4集 埼玉県立民俗文化センター発行 昭和61年 pp221

3、早川孝太郎全集第二巻 未来社(1972)1976 pp472～481

参考文献

上原真人、1997、『歴史発掘』巻11瓦を読む 講談社。

武者英二 吉田尚英（編著）、1999. 屋根のデザイン百科 彰国社

犬丸直 吉田光邦（編）、1992. 日本の伝統工芸品産業全集第3巻 陶磁器・瓦 ダイアモンド社。

引用文献

埼玉県民俗工芸調査報告書第4集、『埼玉のかわら』、昭和61年(1986) 埼玉県立民俗文化センター。

早川孝太郎全集第二巻、1972、未来社。